

令和6年度 第4回 裾野市の教育のあり方検討委員会 記録

※18時30分開会

※20時00分開会を目処

学校教育課長	定刻となりました。本日は、お忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。私が、本日の司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。 はじめに、開会を教育部長よりお願いします。
教育部長	ただいまから「第4回 裾野市の教育のあり方検討委員会」を開会いたします。 どうぞよろしくお願いいたします。
学校教育課長	次に、教育長より挨拶をお願いします。
教育長	今回は、今年度の論議全体を見通し、提言書をまとめる際に方向性について話をいただきたいと思います。お互い助け合う意識の強い街が裾野市だと言えると考えています。結びつきを大切にする教育をめざすために、3つの面から考えることにしました。また、今日の論議の中で、昨年度論議していただいた中間報告書の内容についても触れたいと思っています。よろしくお願いします。
学校教育課長	次に、委員長より挨拶をお願いします。
委員長	いろいろな意見をいただきました。まとめを助ける立場に立って協力をお願いしたいと思います。
学校教育課長	次に、協議事項に入らせていただきます。ここからは、村山委員長に議事進行をお願いします。

委員長	それでは、議事を進めていきたいと思います。本日は、資料にあるとおり4つの事項につきまして協議を進めていきたいと思います。 はじめに、事務局より説明をお願いします。
教育監	(資料の説明) 足りない部分について、議論をお願いしたい。
委員長	一文がとても長いという印象があります。短く切ってもらえるとよいと思います。 また、自分を生かす取組の部分で、自分を生かすということがどういうことかが書かれるようにしたいです。なぜ「自分を生かす」を掲げているのかを説明した方がよいと思います。そして、3つの内容がつながることで人と人とをつなぐ教育になるという考え方なので、その部分を説明してもらおうとよいと思います。
委員	この文書自体、どういう人が読むことを前提としているのか。それによって、書き込む内容が変わっていくと思います。3つの柱についてはこれまでの議論を踏まえたものですが、それを誰が担っていくのかということを考えることも大事な視点なのかなと思った時に、誰が読み、どう次のアクションにつなげていくのかというところもすごく大事なことでと思っています。

	す。もし子供も読むということであれば、どういう言葉がよいのかというところも考えなければならないポイントになると考えます。今までの議論は、大人だけということではなかったと思います。書き方としての情意面、技術面は学校教育に関わっている人が読むとわかると思いますが、それ以外の方が読むとすると難しいと感じました。
教育監	報告書の位置づけとして子供ということは考えていなかったが、子供たちにも読んでもらった方がいいということは感じました。
委員	まず誰が読むのかということを確認にしておく、今後中身を議論していくうえでよいと思いました。
教育長	読み手として市民の方というのが前提かなと思っています。ただ、子供向けの優しく書いたものを用意の方がよいのかと思います。
委員	いろいろな属性の人がいると思いますが、教育のあり方を議論していくうえで、子供たちは絶対にかかわることになるのではないかと考えています。教育のあり方を考える上で、どう関わっていくのかということ語られるものであるとよいのかなと。教育は誰かに与えられるものというのは、これまで議論してきたこととはちょっと違うと思います。
委員長	子供たちにもわかるようなという形に持っていったらということでしょうか。
委員	教育というのは、誰かが整備し、誰かに与えるというものではないということを入れてもいいのかなと思いました。
委員長	教育は、単なる行政サービスではなく、みんなが関わっていくようなイメージでしょうか。
委員	地域とともにある教育というような概念は、そういう要素も含まれていると自分で理解していましたし、自分を生かすということにおいてもそれはたぶん含まれているのかなと思います。
委員	自分を生かす教育は誰がどのようにやるのか、他の二つとは違うと感じています。子供たちがいきいきできる教育とか、内容は変わらないけどそういう言葉に変えた方がわかりやすいのかなと思いました。
委員	もともとの文章自体が自分たちの創造としてまとめて提出するものだから、表現を考えていかないといけないですね。
委員長	教育と言った場合、どうしても教育する側に主体があるという感じになります。学びとすると、本人も関わってくる感じがしますが、教育という言葉を使うと教育をする人がいるという形になってしまう気がします。
委員	お互いに何かを持ち寄るとか支え合うとかそういう意味合いの言葉が、行政で増えてきている感じがしています。学びとかの方がよいかもしれません。自分を生かすということについても、かみ砕いた形の方が伝わりやすいかもしれないですね。

委員	現状の教育を知っているからこそ、こういう答えが出ているように思います。素人の立場からすると、教育のあり方について現状を徹底的に把握し、つきつめて考えることで対策が出てくると考えています。現状を徹底的に考えていくことが大切で、前段をしっかり書いてあれば議論の流れを理解してもらえenと思います。
委員長	現状と課題は統廃合のことをやっていたときのものなので、カバーできる範囲が狭いというのは確かだと思います。もう少し膨らませる必要があるように感じます。 教育＝学校教育なのか、学校が抱える問題だけでいいのかという問題もあるかなと思います。社会教育まで入れるという話になると、公民館などの話も入れていく必要があるのでしょうか。解決策は学校教育にとどまらない形になっているので、そういう意味ではそこまで込みで考えた方がよいかもしれないと思います。
委員	子供たちのやりたいことを許すというところがあるが、それを許すためには先生たちのゆとりが必要ということも大事だと思うので、そこをはっきり書いた方がよいと思います。～を許すというのが重要となると、それを実現するための先生たちの時間の確保をどうするかというのが非常に重要になると感じがするので、そこまでしっかり書いた方がよいと感じました。
委員長	学校教育だけを問題にするわけではないと思うので、学校においてはという形で併記していく必要があると思いました。
委員	私の知っている群馬や長崎の例だと、子供たちの自主性を養うためにエージェンシーを育てる、チャレンジする時間をとる、自分で設計する時間をとることをやっているようです。生徒たちが学ぶ場などを自分で決め、その副産物として生まれた余裕を先生たちが利用しているそうです。先生方にゆとりをつくることを仕組化しなければいけないし、書いた方がよいと思います。高校の先生の話を知ると、中学生はまず問題なくできそうで、小学校5、6年生くらいでもできるのではないかという感じだったので、そういう取組をしていくみたいなことが具体的なアクションとして浮かび上がってくるとよいのかなというふうに思います。
委員長	小学生でもできることだと思います。エージェンシーは次期学習指導要領で核になると思うので、先駆けて入れてもよいかもしれません。コロナ禍の際に、日本の子どもは指示がないと自分で勉強できなかったという事実が非常に重いと言われています。次期学習指導要領改訂の際は、このことに対して何とかしないといけないという話になると思います。
委員	学校の置かれている状況、社会の置かれている状況が変わる中で、学校だけで教育を担保するのは難しいという話が何度も出てきたと思います。そのことを冒頭に書くべきだと思います。人口構造が変わり、人自体減っている中で、学校だけ、地域だけで教育を担保するのは無理ではないですかといった時に、環境変化があるということを前提に教育のあり方を考えなければいけないですね。その上で、自分を生かすなどの話は、個人が能力を所有する、個人の能力で競争するというのは厳しいと思います。人口が減るから、出せるパフォーマンスの総量も減るので、今までどおり個人の能力を伸ばすというやり方は無理が出ると思っています。借り物競争の

	考え方、他の力を借りよう、子供も自分のスキルだけを獲得するという考え方ではなく、援助希求、誰かの力を借りるという観点も入れると、一の話と二の話が有機的につながっていくのではないかと考えます。
委員長	自分を生かすということはパフォーマンスの話。自分を生かすという言い方は、あらわれとしてたぶんウェルビーイングという話で、そのために必要な能力を個人が抱える必要はないということをはっきり言った方がいいかもしれません。
委員	自分を生かすだけではなく、人を頼る教育というようなことかもしれないです。
委員	この場を立ち上げた経緯としては、教育や人を支えるというシステムが街の根幹と考えているからだと思います。その部分を広めにやってもいいのではないかと思います。
委員長	いろいろな人が自分を生かすので、そこに多様性が出てきて。でも皆が違うということだけでは困るので、地域という形で一緒に住んでいる人同士でまとまるというのとワンセットかなというイメージがあります。多様性のところは、もう少しふくらみがある話だったような気がするのですが。
委員	開かれた学校づくりのようなところに、いろいろな意味合いが込められていたように思います。また、ICT を活用した個別最適な学びの促進のところは、いろいろな認知特性や得手不得手を反映しやすくするために ICT を活用していくという視点だと理解しています。
委員	文科省から学習指導要領改訂に向けた論点整理において、通常学級のあり方をインクルーシブ中心に変えていくという話があります。例えば、通常の学級における教育課程をより柔軟に編成できるように考えていくことや、そのための環境整備をしていくということも考えられるということです。通常の学級の OS のあり方そのものをアップデートし、柔軟に組み替えられるようにするということを入れてもらうとよいと思います。
委員	今後行われるであろう議論の内容を入れていくということはよさそうですね。
委員長	多様な御意見がいただけるとありがたいと思います。例えば、やれる部活の数が減っていることで、経験できるものが減っている状況で、多様性が実現できない状況になっています。自分がやりたいことがやれない学校というのも、多様性の欠如の一つの形であると思っています。
委員	今の話は、まさに機会の多様性ということだと思います。そうすると「3」につながる議論なのでしょうか。
委員	具体的な話ができるとよいと思いました。イメージがわからず、具体的に何をするのかかわからないかもしれません。そういうことが書けるのであれば、書いた方がよいと思います。
委員長	不登校、日本語を話せない子など、いろいろな子がいるという文科省の図

	があります。それに対応しようとする、いろいろな多様性が出てきてどんどん広げていくことになるが、今予測できるものから対応できるように広げていくという方針でもよいと思います。ただ、具体的に書かないと何を言っているのかわからないというのは確かだと思います。足りない部分の指摘でもよいのでどうか。今やっていることプラスアルファで書いて、どんどん変わっていくというつもりで提案していると思うので、その辺で入れてもらえばいいかなと思います。
委員	いろいろな子が通常の学級でも過ごしやすいようにという方向のほうがいいのではないのでしょうか。
委員	そういうふうにしていかないといけないと思います。
副委員長	通常学級の中にもいろいろな子がいるから、どんな先生方にも研修をしていかないといけないと思います。先生がまず多様性をもって対応していかないといけないというように受け止めました。それをどう煮詰めていくかは今後取り組むことだが、そういう視点を持っていることがすばらしいと感じました。
委員	支援学級が増えていく中で、全てをひっくるめ、分けないようにする。チーム担任制を含め、分ける時代ではないのかもしれませんが。イメージはわかりにくい、全部ひっくるめて考える時代が来るのかもしれないです。
副委員長	個別的な対応と協働的な学習の一体化を踏まえたものであるべきだと、委員の話を受け止めました。裾野市としてもそれに触れ始めていて、それがどうなっていくかと思っています。
委員	これだけうまく入ってこられない子がいるということは、今のシステム自体を見直さないといけないと考えています。自分たちなりに考え始めていると思うが、大きくは動けていないのかなと感じています。
副委員長	ここにそういうことを入れていくと、読むほうもわかるようになると思います。
委員	日本では、まず発達保障や学習保障を先行させようという考え方がありました。それが、一部の学校や自治体では、同じ場だけど少しずつ目標や内容が違うという授業設計ができないかということをやろうとしています。
委員	支援級と通常級では、差があると思います。一緒にするといっても差はあるわけで、そこをどうするか難しいと思います。
委員	そこが難しいところで、今の状態になっています。トライしているのは、同じ場で学んでいるけど学ぶ内容がちょっとずつ違うということができないかということです。小中はやりやすいようですが、高校は教科の内容が高度化するので難しいようです。まず初等教育でやってみるとよいのではないのでしょうか。
委員	差を埋めるには、担任の先生とかの把握が大事かなと思いました。
委員	新聞で不登校が何十万人いるということで、大きく扱われています。そう

	いう社会だからという人もいるが、教育者としては、当然不登校を放置するというのはできないと思います。不登校を変に肯定するのもおかしいと思うので、こういう中でこうして努力しているということは入れて欲しいと思います。
委員長	学校に戻ることを目標にしないということになりましたし、学校外での学びも学びとしてみますというように柔軟さが出てきていますが、そうするとどんどん分離するということにもなるので、線引きが難しいですね。
委員	今の状態で混ざれないなら学びの保障をしましょうというのが現在の状況ですが、学校自体をアップデートしないといけないというのが我々に突き付けられている課題と思っています。一緒に学べる教育をつくることができるといいです。
委員長	同じ場所にいて過ごす楽しいということを子供が感じられるような支援者の力量は、どうやってできるのかという話があります。
副委員長	違うんだではなく、お互い助けられるような集団ができていくといいですね。
委員	企業は今、大人になって初めて障害を持っている方と向き合うことに四苦八苦しています。教育の段階で混ざっていることが自然となっていれば、向き合い方もわかると思います。ただ、高度障害が強いといきなり一緒に学ぶことは難しいので、そこは段階的かなと思います。
委員	個別のニーズに応えつつ分離しない方法を考えていく中で、子供だけでなく教師も大人もという視点が入れるとよいと思います。今まで当然ということから脱却しないと苦しくなるのではないのでしょうか。分散していくと、人に頼っていくということにつながっていくのかなと。
副委員長	授業の構造、カリキュラム自体が変わっていくと思います。
委員	一人でやりきることの難しさが出てくると思います。子供だけでなく教師も大人もという視点を入れられると、具体性が増すのではないのでしょうか。
副委員長	自分を活かす、多様性、地域を活かすとはどういうことか。いきなり結論ではなく、段階を踏んで書いてもらった方がよいのではないかと思います。
委員	問題意識のようなものがあって、それぞれの関連性。自分を生かす教育と多様性を意識した教育とがやはりつながっているものとして受け取れると思います。
委員	文字が多いと、どうしても難しく感じてしまいます。言葉一つ一つが孤立している感じで、こういうイメージでつながっているという図があるとめざすところがわかると思います。裾野市がめざしているものについて、図と文とつながると読んだ人もイメージできると思います。
委員	知覚の多様性という考え方で、文字認識でなく、図で認識した方がわかる人もいるということを考えると、ビジュアルライズするとよいと思います。

委員	グラントデザインのような感じでしょうか。
委員	こういうことを先生方が言えることが大事です。子供たちも安心すると思います。
副委員長	子供たちは五感で受け止めますね。
委員長	図にすると、イメージとの違いがはっきりすることもあります。
委員	グラフィックで表すと、同じ内容でも人によって変わります。図にすると、学生にもわかりやすいと思います。
委員	高校生に読んでもらって、わかるかどうかを確かめるといいと思います。
委員	読み手が誰なのかが大事です。報告書は大人が読むと思いますが、子供も関わることで、子供に話を伝えてイメージ図を描いてもらうということもありかもしれません。
委員	図にすると、論理が成立するかどうかともわかると思います。子供にわかるようにするのは、とても難しいことです。本質が研ぎ澄まされると思うので、時間かかるかもしれませんがやってみるとよいと思います。
委員	文章だけだと、意味が分からない子が一定数でてくると思います。
委員長	県でも、学生に読んでもらうということをやったことがあります。ある程度形になった後、こういうことをやってみるとよいのではないのでしょうか。図式化すると、弱いところがわかるかもしれません。
委員	地域の部分はすでにやっていうこともあります。よい事例を入れるとわかりやすいかもしれません。
委員	企画から子供と大人と一緒に考えるのは難しいかもしれないと思います。大人が責任をもって子供たちを見るということも必要のように感じます。
委員長	具体的な例を踏まえて書くと、イメージしやすいようになります。
委員	図の案として、SWOT分析をやるとよいと思います。強み弱み、機会と脅威。そういうのを取り入れるとわかりやすいかもしれません。
委員長	それでは、予定されておりました議事はすべて終了しました。皆様のご協力により議事をスムーズに進めることができました。進行をお返しします。
学校教育課長	ありがとうございました。それでは、次に「その他」となります。何かございますか。
教育監	1点、前回の委員会議事録の確認と市ホームページへの議事録の公開についてご意見を伺いたいと思います。 事前に委員の皆さまには、前回の議事録（要点筆記）を送付させていただ

	きました。ご一読いただき、何か修正する点や変更点はございませんか。無ければ、前回の委員会議事録を確認いただいたということで、こちらで保管をさせていただきます。
学校教育課長	他に何かございますか。なければ、閉会に移らせていただきます。閉会の挨拶を教育部長、お願いします。
教育部長	次回の日程につきましては、1月22日（水）となりますので、よろしくをお願いします。また、事前に開催通知や資料等の準備が整いしだい送付させていただきます。 最後に、皆様方から、何かございますか。 無いようですので、これで「第4回 裾野市の教育のあり方検討委員会」を閉会いたします。 お疲れ様でした。